
短編連載

柚 雨深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編連載

【コード】

N7664H

【作者名】

袖 雨深

【あらすじ】

短編小説を繋がりもなく、好きなように書いていく。

千春は携帯電話を掴み、亮子の番号を検索しながら手が止まった。フラッシュバックのように、十一年前の出来事が蘇ってきた。亮子に來た不明の電話・・・そして、待ち合わせに遅れて現れない亮子を待っている時に、自分にも來た最後の一桁の違う電話。出ようとして亮子が現れ、電話に出なかったこと。その時の留守電も気持ちが悪く、確認もしないで削除したこと。

あの時、電話に出ていたら、どうなっていたのであろうか、留守電には何が入っていたのであろうか・・・そう思うと、千春は言いようのない不安な気持ちになった。

亮子と同じ様な電話が自分にもあったことは、誰にも話していなかった。忘れたかった、だから留守電も確認しないで、直ぐに削除したのだった。そして、着信した電話番号をMと登録し、着信拒否番号として設定したのだった。その後、その番号からの着信は、そういえば一度もなかった。今となっては、登録したことも忘れていた。「どうしよう・・・」

千春は今、不安な気持ちは大きいが、十一年前の自分に掛かってきた、自分と最後の一桁違う番号に電話しようかと迷っている。隣に直樹が居る時にするのだったと後悔したが、決心して、普段目に付かないようにシークレット登録してあるMの番号を探した。シークレットには3件登録されていた。不吉なM、あの事件の後直ぐに亮子は電話番号を変更したが、変更前のいわゆる亮子の電話番号、それと行方不明となった博之の電話番号だった。

今も不安な気持ちはあるが、千春は勇気をだしてMの電話番号を押した。呼び出し音もなく、あまりにあっさり留守電に繋がったので、安心感のような気持ちになり、身体から力が抜けた。

「よかった・・・」

怖さもあつたので、相手が出なかったことに安心したのだった。

「今度は直樹と一緒にの時に・・・」

そう思うと、やはり亮子に電話しようかと再度検索しようとして・・・

「えっ、ちょっと待って・・・どうして、呼び出し音も鳴らずに留守電・・・」

千春はあり得ないことに気がついたが、恐ろしくて確かめることが憚れた。Mで登録されている番号は、怖くて確かめることはできない。

「私の考えたことが正しければ、それは・・・」

直樹は血液の流れと連動して感じる頭の痛みで目が覚めた。やはり、頭部を何かで強打されたのは現実のようだ。

「なんて様だ、刑事の俺が・・・」

殴られた時、背後に人の気配に気づくことなく、突然のことだった。

「今居るこの場所は・・・」

直樹は自分の状況を考えた。部屋の様子、フローリングの床と本棚、忍び込んだ本田理沙の部屋に間違いはなかった。

「気がつかれましたか」

目の前に一人の女性が立っている。本田理沙？ それとも五十嵐の言っていた、別人格のマキ？ 直樹は、女性の顔を見ることしかできなかった。

「何か言いたそうね、あなたを殴ったのは、私ではなくてよ」

本田理沙かマキか分からない女性はソファーに座り、タバコに火をつけた。

「私が帰って来た時には、あなたはそこに倒れていたの」

カーテンの隙間から見える暗闇は、時間の経過を物語っていた。直樹は自分が気絶していたことを悟り、現状の把握に努めたが、殴られて時間が経過したことしか理解できなかった。

「刑事さん、私の許可なくこの部屋に入ってはいけないわ。私のフ

アんでもこの部屋は知らないはずなのに・・・私のファンでは、なさそうね」

「お前は本田理沙、それともマキか」

「もうそこまで知っているのね、でも残念。そんなことは、どうでもいいことなのよ」

「どうでも、いいこと？」

「そう、どうでもいいことなの」

その時、直樹の携帯が胸のポケットで震えた。携帯も、そして、背中の日記帳も取り上げられていないことに気づいた。

謎

千春は机の上のテープを眺めながら亮子が電話に出るのを待っていた。呼び出し音は鳴っているが3回、4回・・・まだ応答はしない。テープが巻き戻しされていないのを見ると、いつもの習慣で頭出しをしておこうと、デッキにテープを入れた。

巻き戻しのつもりが、早送りを押したようだ。千春は最後までテープが早送りされると自動的に巻き戻しされることを知っていたので、亮子の電話の応答に集中していた。応答はなく、留守番電話になつて千春が電話を切ったところだった。

早送りでノイズしか写し出されていなかったテレビの画面に、映像の一部が見えた。まだ、早送りのままになっている。おそらくテープの上書きをした時に、一部の繋ぎ目に残った古い映像ではないかと千春は思った。千春はテープを巻き戻し、再生した。

「どういうこと・・・」

千春には理解できない・・・短い映像の中に映っているのは、本田理沙と亮子。それもお腹が大きく妊娠している亮子なので、二年以上前の映像か・・・そして、二人と一緒に映っているのは、成長した博之？ 高校生の頃の優しい面影はなく、顔は青白く、目は鋭い。タバコを啜え、二人と何かを話している様子で、画像は10秒もない短さだ。本田理沙と亮子も笑顔ではなく、亮子と博之の話を本田理沙が横で聴いている、そんな感じに千春には受け取れた。

それと話をしている三人に共通している事が、なぜか千春には気になった。三人とも手に携帯を持っていた。それもはっきりとは確認できなかったが、おそらく色も形も同じ物だ。

「なぜ、この三人が会っているの・・・それに、なぜ博之もいるの・・・」

千春はこの映像を見て、亮子と何度か電話で話をしているのに、博之が元気ならば、どうして亮子が博之の事を自分に何も話さない

のか不思議だった。亮子が私に何も話をしない理由が、何かあるのか。

十一年前の同級生の事故、自殺として処理されたいけれど、真相は解明されていない。博之の失そうもわからないままになっている、それなのに……。

あの時、亮子に同級生の事故と関係がありそうな電話があったことは、警察には言っていない。意味不明の電話、同級生の事故死、博之の失そう、この三つの事件を私達は関連付けて考えていたが、本当に関係があるのだろうかとか千春は考えていた。

確かに、あのダブルデートの時、亮子に不思議な電話があり、その後、博之が失そうした。同級生の事故死と意味不明の電話、それに博之の失そうを関連付けるほうが、無理があるのではないか、千春はそう考えていた。個別の事件として考えると、自殺かもしれないが同級生の転落の事故死、博之の家出か失そう、それに変な間違い電話、そう考える方が自然ではないだろうか。それに、この映像では少なくとも博之は亮子の知っているところで生きている。

しかし、もしこの三つの事件が全て繋がっているとしたら……千春は何か、言いようの知れない恐ろしさを感じた。

結局、何度か亮子に電話をかけたが、全て留守電に繋がってしまった。千春は大きな不安のようなものを感じたが、至急電話を欲しいと亮子に伝言を残した。千春は今の不安な気持ちを打ち消して欲しくて直樹に電話した。直樹もまた電話にはでない。

そこで千春は意を決し、以前から考えていた一つのことを実行に移すことにした。自分の携帯番号の最後の二桁の違う番号に電話することだ。今でも迷っているが、実行に移すことにした。あの時着信した番号は携帯の中に今でも残してあった。

「だいじょうぶ、ですか……」

「あなたは……」

頭部に鈍痛を感じながら意識を取り戻した直樹は、頭の痛みを忘

れる程の驚きを感じた。

「気がつかれたようですね」

「あなたは、確か・・・」

直樹は今自分の目の前にいる人物が、どうしてこの場所にいるのか全く理解できなかった。

「あなたとは一度しかお会いしていませんが、わかりますか」

「長浜庄一郎さん、ですよね」

直樹の目の前にいる人物は紛れもなく、亮子の夫の長浜庄一郎だった。確か本田理沙の部屋に忍び込み、何者かに襲われ、気を失ったと思った直樹だった。

直樹は今の自分の状況が判断出来ないうでいた。暗闇の中心が白い霧となり、霞んで遠くに見える小さな明かりが少しずつズームアップされて来た。

「これは・・・」

直樹には、遠くのビルの屋上に立っている少女が少しずつ見えて来ている。

「あの時、死んだ少女？」

画像がだんだんと近づくにつれて姿はより鮮明となり、直樹にはもうすぐ少女の顔も確認できるほどに近づいた。

「嘘だろ・・・」

その少女の顔がハッキリと直樹には確認できた。ビルの屋上に立ち、今にもビルから落ちそうな場所で携帯を両手で握っているのは、間違いなく少女ではなく自分だった。姿は少女、女子の制服を身に付けてはいるが、間違いなく高校生の若い自分だ。声を出そうとしても、声は出ない。身体も動かない。

「金縛り状態なのだろうか。確か、あの部屋で千春の電話に気付いた瞬間頭部に痛みが走ったが、今は痛みも感じない。どうしたのか、自分は死んだのだろうか、今見ている映像は夢か、それとも現実なのだろうか・・・」、「夢か現実か、それさえも今の直樹には判断できないでいた。

ビルの屋上に立っている直樹は、両手で携帯を操作している。どうやら誰かに電話を掛けようとしている。その時、直樹の手元の携帯が振動し、着信で光るが音は聞こえない。着信の番号は自分の携帯番号と最後の一桁だけが違い、画面には「田川千春」と出ている。「そんなはずはない。千春の携帯の番号であるはずがない」

直樹の意志とは無関係に手が着信と動く。声を出そうとしても無駄だった。着信となった携帯から聞こえてきたのは、ガラスの割れ

る音と聞いたことのない生き物の叫び。そして重たい物が落ちた鈍い音が聞こえた瞬間、画面の中の若い直樹がビルの屋上から平然と飛ぶのが見えた。

同時に画像はまた白い霧となり、直樹の身体が暗い闇の中に落ちていくように感じている。

「まだ、地面には落ちてはいないようだが・・・」
直樹自身もよく理解できない状況でいた。

「十一年前博之が消えた。自ら消えたのか、それとも誰かが、何かの目的を持って消したのか・・・」

直樹には全く思い当たることはない。暗い闇の中に落ちながら聞こえて来た二人の話し声、直樹には確かに聞き覚えがあった。それは、「この部屋のカギを自分に渡した五十嵐と、遙か昔姿を消した博之か、どうして・・・」

千春は携帯のメモリから亮子の電話番号を探し出し、発信しようとして手が止まった。

十一年前のあの時、喫茶店で約束の時間を過ぎてもなかなか来ない亮子を待っている時に鳴った千春の携帯。千春の番号と最後の一桁違う番号。出ようとしたその時亮子が現れ千春は電話に出なかった。その時亮子が言っていた。「携帯をなくして連絡できなかった・・・」。

その後、亮子のなくした携帯の話は聞くことはなかった。「見つかったのだろうか。番号は今も無くなる前の番号を使用しているが・・・」

「もしあの時、私も亮子の様に自分の番号と最後の二桁の違う電話に出していたら、何か状況が変わっていたのであろうか・・・だいたいの電話の主は誰？ 電話をする目的は？ そう言えば、直樹には電話が来た話は聞いていない。博之は確認のしようがないが・・・やはり亮子に確認しなければならぬ」

千春はビデオの存在も勿論気になってはいるが、それより、今にな

つて千春は十一年前のあの時、亮子の出現と同時の自分への電話の相手が誰なのか急に気になった。そしてあの時、千春の電話番号を知っていた人間、そして亮子の電話番号も知っていた人間、そして本田理沙とも繋がりがあった人物となると千春に思いつく人間は二人しかいなかった。一人は亮子、そしてもう一人の人物は、未だビデオと共に行方不明の博之だった。

しかし、千春と亮子はその後博之の事について話しをすることはなかった。話を避けていたこともあるが・・・もしかして、亮子は博之の行き先を知っているのでは・・・そんな疑いが千春には湧いてきた。千春は携帯のメモリから亮子の電話番号を探し出し、発信した。

亮子は直ぐに電話に出た。

運命

自宅の縁側に腰を下ろし、桜の花びらの散る庭を見詰めていると、チャコの顔が思い出される。1年前までは隣に一緒座り、梅のつぼみから遅咲きの山桜までの時間をよくこの場所で過ごした。

両親が事故で亡くなってからこの家に帰ることはなかったが、私が最後にチャコと生活するのに選んだのが、慣れ親しんだこの家だった。鬱蒼とした庭に手を入れると、昔の思い出もよみがえり寂しさもあつたが、チャコの存在が私の孤独を消した。たとえ短くとも後悔などしない、二人で静かな時を過ごすことを私は望んだ。しかし、それも長くは続かなかつた。

早朝、窓際の純白のカーテンから漏れる朝日を浴びたチャコを見舞うと、家に帰りたいと駄々を捏ねた。直ぐに帰れると言う私の嘘も見破っていたのかも知れない。食が細くなり、投薬の種類も増えるとチャコの願いも弱くなって、病院から出たいと言う言葉も希望のように聞こえる。

主治医から一泊だけの外出許可が下りた。その時既に、入院が長期になるとチャコも覚悟していたのかも知れない。久し振りの私とのデートに子供のように喜び、楽しそうに帰る準備をする。昔飼っていた猫の赤い首輪をぶら下げたバックを持ち、「準備OK」と元気に笑う。チャコとの最後のデート、病院から自宅までの寄り道の短い短時間のデートだった。

チャコと二人の半年振りの庭は、梅の実が小さく膨らみ山桜も葉桜となっていた。

「ねえ、覚えている」

「なに」

「私と康太郎が初めて会った時のこと」

「なんとなく」

「なんとなくなく、なの・・・」

私ははつきりと覚えていたが、なんとなく恥ずかしく素直に返事が出来なかった。高校二年、家庭の不幸で叔母の家に下宿することになり、学校も転校することになった。転校初日がチャコとの出会いだった。教室の一番後ろの窓際の席が私に用意された場所で、そして隣がチャコだった。

「美人の隣でラッキーと思わなかったの？」

「昔のことだし忘れたな」

「もー、恥ずかしがりやなんだから。私はあの時、なんとなく運命を感じたかな・・・」

「運命？」

あの時席に座ると、頭に桜の花びらが付いているとチャコに笑われたのを思いだした。本当に可愛らしく笑ったチャコ、これからも毎年桜の時期になると思いだすのだろうか・・・

チャコを一生忘れられない時間を作ってしまった。これが、自分の運命かも知れない。

情事

黒檀の柄と鋼の刃、本焼きのペティナイフ。この部屋の住人は料理に拘りを持ち、自分でも調理をする。男が道具に一番拘るのは包丁らしい。

刃の長さは14センチ、軟鉄の間に安来鋼を割り込ませ、欠け難い作りにした両刃のナイフだ。強度もあり、人を刺しても折れることもないだろう。私の手にはこれ位が丁度扱いやすい大きさだ。牛刀など手に余り、料理で使用することもないのに巧く使える訳がない。これだと力が弱くても一瞬で刺せ、失敗もないはずだ。黒檀の柄も手の平に馴染み、初めて握っても違和感がない。料理もこのナイフだと多少は上手に出来そうだ。

この部屋で握るチャンスもあつたが、男がそれを拒んだ。私には何故だか今でも理解できないが、深い意味もないようにも思える。アイスピックはどこにでもありそうな安物だが、これも曲がることはない代物だ。

冷蔵庫を開けると、水のペットボトルにいくつものパチンコの玉の様なセラミックが入っている。もうすぐ冷たくなる男が、マルチ商法で販売している商品だ。昨夜の焼酎の水割りも確かに普通の水とは違った。よくある健康器具の一種だが、自分で実感してみると満更効果が無いとも言えない。

しかし、もう体に良い水はこの男には必要ない。ボトルの水を捨て、セラミックを取り出し男のスポーツソックスに詰めた。ブラックジャックの完成だ。こんな物より、重さのある電池が最適なのが見あたらない。しかし、これで力の弱い私でも寝ている男なら、抵抗できないくらいにはできるはずだ。

教室のように広いこの部屋の壁に飾られている楔打ち込みの斧も目についたが、酷く部屋も汚したくないし、自分も汚れたくない。カーテンを被せ、返り血を浴びないように頭をブラックジャックで

殴り、頸動脈をナイフで切り、動きが止まれば落ち着いてアイスピックで心臓を一刺し。それでこの男も終わりだ。今の私だったら、感情もなくこの男を殺すことはできるだろう。

まだ完全に嫌っていない。だが今、気持ちが高ぶった自分が思い付いた行動に無い事をするとは出来そうもない。全て考え通りに動くしかないのだ。

死体の処理は何も考えてはいない。このログハウスごと燃えて貰うだけだ。木材の火力で殺人の痕跡も消えるほど焼ければと考えているが、今の日本で完全犯罪など最初から無理だろう。

自分が行動していなければ、何時かこの男が同じ行動を私にしたかも知れない。自分が何も気づかず、知らなければそれでも良かったが、些細な男の行動が私を決心させた。

普通に変わらない何時もと同じ二人の時間。美味しい酒と、男手作りの酒の摘み。私の為に考え作った料理。その気遣いが余計に非常を感じさせ、寂しさを増した。

明け方に発した男の寝言に、私は切れた。無意識だからこそ余計に許せなかった。

猫の様に暖かい男の背中でも、この二度目は自分を押さえられなかった。

想

毎年、母の日に昔の恋人樋口友の母と友の水子供養にこの寺に来る康太朗。

今年も一年振りに墓参りで奈良に来た。

早朝の寺で水子供養位牌にお参りし、その後同じ寺の樋口家の墓参りをする。

今年が水子「光」の三十三回忌なので最後にしようと思っていた。毎年康の墓には白い百合を供えていた。

墓参りの時に友と一度も会ったことは無かったが、友も墓参りをしているのは康太朗だと思っている。

康太朗以外に墓参りをする人間を知らないからだ。

友の水子は康太朗の子供ではない。

康太朗と知り合う前に交際していた男の子供だった。

だが結婚出来ず失意のどん底にいた時に康太朗と知り合った。

康太朗には家庭があり、友とその頃は交際もして居らず、康太朗に付き添われ友の希望で掻爬したのだった。

それを後悔した康太朗。

その後二人でこの寺で水子供養したが、一緒のお参りは最初だけでそれ以後は康太朗一人でお参りしていた。

友が康太朗とお参りするのは躊躇ったからだ。

その後七年友と康太朗は交際し一緒になろうとしたが、友が康太朗の家族の事を考え一緒になることを諦めた。

そして別れ。

別れて直ぐに友が見合いで結婚を決め、直後に康が亡くなった。

康太朗は葬式には来なかったが、命日の母の日には毎年お参りをしていた。

結婚後直ぐに出産した友。

康太朗は知らないが、その子は康太朗の子だった。結婚して半年で

妊娠が分かり友は直ぐに離婚して康太朗の子を産んだが康太朗は知らない。

康太朗が今年墓参りに行った時にその子、千春と会う。

康太朗は十年前に墓参りに来た時にお墓の傍の木に結ばれている紙を見つけない。

そこには

「天地の 神の理 なくはこそ 我が思ふ君に 逢はず死にせめ

」

それが毎年続き今年友に会いたいと思つて来た。

しかし、今年は結ばれていなかった。

毎年康太朗が来る前日に友が結んでいたが、今年は来る事が出来なかった。

そのかわり、千春が来た。

千春も今年事情を初めて聞かされた。

今まで不思議だった父の影がないことをやっと理解し、父に会いにきたのだ。

父と分かり喜ぶ千春。

でもどうして友が・・・いない不思議な康太朗・・・

去年友が亡くなっていた。

墓には友の名が・・・

儂い一夜の情事に思うと、これ以上悲しいことはない。

昨夜初めて会った時は、こんなこと考えもしなかったであろうに。ほんの僅かの時間で情が移ったのか、まさかそんなに若くもないのにいったいどうしたというのか。

きつと窓から見た街のネオンと、朝靄の所為。

名前も知らず、久し振りの会話と肌の温もりを感じただけなのに、気持ちを揺るがすこの感情は久しく忘れていた高まりが原因なのか。寂しい気持ちを、また酒と男で消してしまった。

何処の誰かも知らない背中を向けている男も、昔馴染んだ男の匂いとはやはり全く違った。あの男を思い出したのか・・・もう今では何処で何をしているかも知らない男なのに。

ソファの上に脱ぎ捨てられた下着を見ると、直ぐにでもここを抜け出したい。そんな気持ちもあるのに、タバコを吸っている自分は落ち着き、いつもの部屋に居るように行動している。

彼の部屋で目覚めた時は風に揺れる木葉の音がやけに大きく聞こえたけど、遠い都会の此処では静けさが拡がり、口から吐くタバコの煙が白く漂い続け、時間をかけ消えていく。

田舎を逃げる様に離れてからもう3年も経ってしまった。他人にも迷惑をかけ多少の後悔もあったが、彼のプロポーズを結婚式の朝に断ったことはもう忘れた。化粧も濃くなり、私は都会の中でひとり息をしている。

話す相手もなく、昔だと考えられない様な生活。そんな毎日がこの場所ではごく普通に過ぎて行く。胸が締め付けられ携帯を握るも着信も無く、電話できる相手も私のノルマに貢献してくれる店の嫌な客の顔しか思い浮かばない。私を心配している母にも今更何を語ればいいのかも分からないと思うと、発信ボタンも押せない。番号は変えていないのに、母からの着信もない。

どこで道を間違ひ、今何故こうしているのか、自分でも良く理解できていない。結婚式場も花嫁衣装の準備も全て整い、式当日の朝に気が付くとポストンバックひとつで行き先の決まらないバスに乗っていた。

彼が嫌いだった訳では無かった。優しく、誠実で愛されてもいたと思う。あのまま式を挙げていれば平凡ではあるが、幸せな生活は送っていただろう。どうして式場に向かわず、今此処にいるのか自分でもまだ答えは出せていない。

目の前で私の事など忘れた様に寝ているこの男も、明るくなった今、どうして誘いに乗ったのかも疑う程私の求めている人間とはかけ離れているのに、この感情の起伏はどうしてなのか。寂しさが誰でも良いと求めているのだろうか、投げやりに、このまま流されそうな気持ちになる。

周りの状況が、自分の希望とは違った行動を衝動的に促している。考えが纏まる前に少しずつ、そして急速に自分は奈落の底に落ちて行く。頭の中では理解していても、今の自分にはこの行動を止める力も無いように思う。孤独な自分が気持ちの楽な方向に向き、一人の時間を消化していく。

都会の中では馴染んで消えても、私を知った人間に会えば、厚化粧

と酒とタバコの匂いの強い阿婆擦れにしか見えぬ、声も掛からない
である。

私はもう自分の知らない人間に変わってしまったている。

最終章 殺意

博之も直樹と同じ様に、理沙の部屋で五十嵐にバットで頭部を強打され、負傷した。博之は意識がある内に逃げ助けを求め、そこで彼の行方は消えてしまう。頭部から出血していた博之は通行人に因って救急搬送され、運ばれた先が庄一郎の病院だった。

博之は庄一郎の父の手術を受け命は助かったが、記憶喪失の様に言語に障害と、そして身体の左半身と下半身も麻痺が生じた。

院長の診断は「高次脳機能障害」、五十嵐の暴行により脳に損傷が生じ、その為、記憶と言語と身体機能が低下し、彼は名前すら相手に伝えることが出来なくなっていた。

それから11年、博之は誰にも知られる事も無く、庄一郎の養父の病院の関連する生活支援施設で、人との意志疎通も出来ない状態で現在に至っている。

院長は庄一郎の話から、娘の死の真相を自ら究明するため警察にも連絡せず博之の治療に勤めたが、現在までその快復は見られない。

別の専門家の診断でも庄一郎の父の診断同様、今後社会復帰出来るまで博之が快復するのは、不可能に近いと言われた。

庄一郎はこの11年の間に父の後を継ぎ医師となり、現在は副院長となっていた。

息子の庄一郎から明美の死の状況を聞いていた父は真相を解明したく庄一郎と相談し、博之の家族にも連絡はせず、自分の病院と関連の支援施設で世話を続けている。博之本人に全く判断能力と行動機能が無い事、それと母子家庭だった事も親子の行動を助けた。博之から見ると、それは一部幸運だったに違いない。博之の生存が本田マキに知られると、再度狙われる可能性もあるからだ。しかし、実際はそうでは無い。本田マキは五十嵐を支配していたが、本田マキを支配し誘導しているのは誰あるう、自殺に追い込まれた明美の兄、庄一郎だったのだ。

「博之！」

生活支援施設の居住棟で博之を見た千春と亮子は11年振りの青年となった博之を確認し、互いに顔を見合わせた。でも亮子は、どうして夫の庄一郎がこの事を自分にまで隠していたのだろうと思った。

「彼は多分、君等の事は分かっていると思うよ・・・」

医師としての発言なのか、それとも完全な第三者としての立場での物言いなのか、彼の言葉はいつもの亮子が受ける庄一郎の暖かさは感じられなかった。そして、どうして今まで自分にまで隠してきたのだろうと考えた。明美の兄庄一郎は亮子の話から少女の死んだ事実と、それに関連する博之の失踪、そして周りの状況も理解している筈である。どうして何も話さなかったのか。ある筈は無い、全ては庄一郎の企みの行動と、結果なのだから。

庄一郎は後妻の子だった。その為本妻の子供の明美が気に障り、将来の病院の跡取りの事も考え、妹を抹殺する事を大学入学の時に既に考えたのだ。

幾つかの偶然が庄一郎を助けた。そして一番の大きな偶然は、庄一郎と博之が実の兄弟だったと言う事だ。両親の離婚と実父の死で、博之と別れた庄一郎が妹と交際している博之に出会った。それから幼い頃に考えた復讐を、庄一郎は実行し始めたのだ。二人の両親が経営していた病院を乗っ取ったのが、今の父だった。その復讐の犠牲となったのが明美と、そして秘密を守るために、これから実の弟までも殺そうと考えている庄一郎だった。亮子の携帯に千春の電話番号を登録し直したのは、博之だった。

全てはそこから始まり、まだ始まったばかりだ。

時計

私の部屋の時計はいつも5分進んでいる。

ちようど昨日の今頃直したのに、また5分進んでいる。

いつもそうだ。

なんと時刻を正確に直しても、1日24時間で5分進む。

しかし不思議なことに5分以上は進まない。

1ヶ月そのままにしても進むのは5分だけだ。5分進むと正確に時を刻む。

進む時計は壁の柱時計。

最初は時間を合わせる時計が狂っていると思い、テレビ、携帯、そして腕時計と全ての時刻をNHKの時報に合わせたが狂うのは柱時計だけ。

それも僅か5分。

1ヶ月過ぎても、2ヶ月経っても進むのは5分だ。

遅れることもない。

この時計は20年程前に転職した時に前の職場から送られた記念品だ。

家庭の都合で仕方なく転職した職場、辞めたくは無かった。

その思いが強かったのかこの時計を大切にし、何時も見える一番目立つ場所に掛けておいた。

たまたま見た時に狂いを見つけ、電池が切れたとは進んでいるのだから思わなかった。

何度合わせても狂うので電池交換してみたが、次ぎの日にはまた5分進んでいた。

なんと時間を合わせても、どうしてか5分だ。

私は不思議になり正確な時刻を合わせる時に5分遅らせて時刻を合わせた。
そうすると24時間後には正確な時刻を指している。その後狂うことはない。

しかし、そうすると私の気持ちがおかしくなる。

正確な時刻に合わせた時計ではないのに、24時間後どうして正確な時刻を刻むのか。

時計を見る度に気になり、時刻を一旦10分進ませ、そして正確な時刻に戻した。

そうすると次ぎの日には正確に5分進んだ時刻を刻んでいる。

どうやら時刻合わせをした時を基準として、そこから24時間で5分進み、そこから正確に時を刻む。半年経過しても進むのは5分だった。

電池が切れると、遅れる前振りもなく急に止まる。

この時計の癖なのかも知れない。

およそ機械に癖など考えられないが、他人には開けにくいドアも、その住人だと癖を覚えており即座に開けられるようなもの、そう考えた。

しかし時計には一切手は触れないのだ。しかし進む。

電池を交換しても症状は変わらない。5分進む癖、機械の故障だとしたらどうして5分以上進まないのか不思議で堪らない。

このメカニズムを発見してから、私は柱時計を見る楽しみも増えた。時間を確認する以外に見る事の無かった時計、まず殆どの人がそうであろう。骨董品で高価な美術品とか、鳩時計のようなカラクリ時計以外目的は一つの筈だ。

時計を修理に出すなど勿論できない。5分の狂いなどどうでも良い事だし、それより今となつてはこの時計が正確に5分進んでくれていることが嬉しくてしかたがない。それに修理に出しても、おそらく24時間後には5分進んでいるだろう。

今の時間は5分後の未来の自分。失敗したら5分前に戻ればそれが現実の自分。

そう思いたい事が今迄何度となくあつた。振り返るとこの5分は私の救いの5分だ。

しかしそれは残念ながらこの部屋の中でしか有効ではない。

外で言つてしまつてから後悔した言葉も、交通違反で捕まつた時も、この5分があれば後悔先に立つたのだ。

私はこの部屋の中に限つて、5分後の自分が見えるのだ。今の自分が5分後の自分だから後悔すれば目を瞑り5分待てば良いのだ。

この5分が外の世界でもあつたなら、おそらく私の人生は変わつていたと思う。

後悔も無くなり、失わなくても済んだものも残つた筈だ。

でも、そうでは無かつた。

振り返り考えると、取り返しのつかない事が多すぎた。

それが現実の私なのだ。

この5分、私がこの部屋で人生を終わるとしたらどうするのだろうか。たぶん、携帯を持ち誰かに電話をするのだろうか・・・ たつた5分だけど、一言声を聞きたい。

それは・・・
もう戻らない、あのひとの声だろう。

レジスタンス

夫は生前何を思ったのか寿陵を建立した。

神仏、宗教を嫌い、親戚の法事さえも行くことの無かった無頓着な人間が大金を払い、自分の死後を考えてのか。

おそらくそれは、自分の寿命を悟ったのだろう。

寿陵を建立から3年後に、夫は突然この世を去った。世間的には突然失踪した事になっているが現実には私が夫を殺し、隠したのだった。

私は結婚前の夫の生い立ちを詳しくは知らない。

夫と普通の結婚生活を送っていた私。

しかしその夫は突然行方不明となり、行方の知れなくなった夫を必死に探したのは私と夫の弟だった。その時彼が私に近づき、そして今は私の3番目の夫となった。

兄を捜す男と、義姉の私との奇妙な関係が何時しか恋愛となった形だが、実態はどうだったのであろうか。

兄が行方知れずとなり発見できない状態で1年が経過した頃、彼は私にプロポーズをした。

私は彼の両親の反対もあったが、結婚を受けた。しかし、私はこの男の兄の夫を捜し続ける素振りを見せ続けた。

居なくなつた男と結婚生活をする中で揃えた家具。その家具で、弟と新たな結婚生活が始まつた。

世間からはいろんな事を言われもしたが、私は気にしなかつた。夫となつた義弟も、そんな事は気にするなと私に話した。

どういふ気持ちでこの男が私と生活していたのか、理解出来ない事

も多い。

兄が行方不明となり、その兄の妻と結婚する。家財も全て新調する事も無く、揃っている物を使った。

亡くなった兄嫁と弟が結婚する話は戦争中では良くあったと聞くが、現代では極稀だろう。

普通不明者を探す家族としては、もしそうするとしても行方不明者が発見され生死が分かるまで待つのが常識だと考えるが、夫となった男は何かを決心したように探すのを止めた。

それもあって、多分私と結婚を決意したのだろう。

世間に向けては探している素振りを見せているが、二人の現実はずれた。

それはおそらく、彼が私の秘密に辿り着いたのだ。

夫を殺した自分。私が何故彼を殺したのか、今も本当の気持ちは理解できていない。庭のバラの下で眠っている彼の血で、今年はより鮮明に赤く発色するバラ。

そのため彼を殺したのかも知れない。愛していたのか、結婚してまでどうして殺さなくてはいけなかったのか、自分でも理解できて居ない。

夢か現実か判断できないが、私はもう何人も憎い人間を抹殺している。自分を裏切った男、私の悪口をふれ回った会社の同僚、隣の幸せそうに見えた夫婦、全て自分の気持ちの中で殺人を実行していたが、その一部は現実かも知れない。

全く知らない人間に向けた憎悪、衝動的な気持ちで現実を判断できなかった。自分さえも理解できていないのだから仕方がない。

世間では私の事で騒いでいる。私の周辺で死んでいる人間が多いと

言うのだ。

私は結婚詐欺とも言われているが、そんな事をしたつもりは一度も無い。現に少し前まで夫だった男も自分で自分の墓を建て、そして死んだのだ。

手を下したのは私かも知れない。しかしそれは状況証拠でしかない。私が夫を殺したという確証は何もないのが現実だ。

私は今まで多くの男から結婚を申し込まれたが、結婚をした男は庭のバラの下で眠る男だけだった。

実はこの男の前にも結婚が決まり、式の準備も整い式当日を待つだけの男がいた。私の夫だった男の実の兄だ。

私は三兄弟3人全員の妻となったのだ。

恋愛で結婚を決め、新居に移り式当日を待った。しかし、当日式場に彼は現れ無かった。それが最初の結婚相手、この兄弟の長男だった。

当日、携帯には少し遅れるとメールが届いたが、結局結婚式が終わっても、それから1ヶ月が過ぎても彼は帰っては来なかった。

式の一週間前に仕事で海外の支店に顔を出し、式の前日に帰国している筈だった。海外支店の現地の人間が空港まで送っているので、帰国している事は間違い無いのだ。

その日の夜に私の携帯には、これから新居に向かうとのメールが届いている。庭のバラも彼が好きで入居を決めてから植えた物だった。

趣味の少ない男だったが、花は好きで手入れは全て自分でしていた。その男と新居になる筈だった家で、その男と次男と結婚生活を少し前まで送っていたが、今は1人でバラの手入れをしている。

そして直ぐに三男との生活が始まる。

近所では長男は未だに行方不明。そしてその弟次男は突然失踪したので、ここは呪われた家として噂話にされている。そして次男の行方も分からぬまま、その弟、三男と結婚する私は世間から呪われた女、疫病神と言われ、そして二人の失踪についても疑われている。三兄弟全ての妻となった私。そして二人の兄弟が謎の失踪。

長男が行方不明となり次男との結婚を報告した時、私の母親は結婚に強く反対した。行方知れずとなった男が生きている可能性もあり、結婚には反対だった。ましてその相手が実の弟と聞いて母は呆れた。同じ事を二度も繰り返し、三男と結婚すると聞いた母は私の精神状態までも疑い、親子の縁を切ると迄言っただけで本当に音信不通となった。

次男が行方知れずとなつて1ヶ月が過ぎ、三男が私の前に現れた頃、驚く事実が分かった。

実は私と実際にこの家で夫婦として生活していた二男には、結婚を決めていた相手がいたのだ。私と離婚をして、この女性と再婚すると知人にも話しをしていた。

その女は次男の会社の海外支店で働く女だった。

帰国する時次男は、帰国して私と離婚の話をすると言っていた。

この家の庭のバラは、来年も赤く発色するだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664h/>

短編連載

2010年10月16日00時26分発行